コミュニティの主体形成を狙いとした中山間地における地域資源の保全活用に関する研究
—— 香川県三豊市詫間町積地区を対象として ——

西　成　典　久

1．はじめに

積地区（三豊市詫間町）は「花と浦島伝説の里」として荘内半島東岸に位置し，背後には紫雲出山が控え，対岸には粟島が望める風光明媚な集落である。しかし，近年の少子高齢化の進行や人口減少に伴い，2013 年度には 120 年続いた箱浦小学校が廃校となるなど，地域活力の低下が懸念されている。また，地区内に存在する自然環境・文化資源等の豊かな地域資源[1] の保全が困難になってきており，農村地域の公益的な役割[2] が求められている中で，どのような方法でどのように取り組めば，地域の活性化とともに地域資源の保全が図られるのか，こうした検討がいまだ進んでいないのが現状である。また，同地区の重要な地域資源である「フラワーパーク浦島[3]」についても，その継続的な管理運営が問題となっており，地域資源の保全のみならず，更なる活用方策を

1）　日本国語大辞典によれば，「資源」とは「ある目的に利用され得る物資や人材」と定義されている。また，経済産業省は地域資源活用事業（2007）のなかで，「地域資源」とは，「地域の特産物として相当程度認識されている農林水産物，鉱工業品及びその生産技術，観光資源」としている。本稿では，「資源」はそれを捉えようとする主体（および社会的背景）によってその価値は変化しうる，という前提を踏まえたうえで，「地域資源」とは「ある目的に利用されうる地域の環境，食，文化といった有形・無形の所産」と定義したい。

2）　ここでいう農村の公益的役割とは，農業を通じた農作物の供給のみならず，雨水を一時的に水田や畑にためる洪水防止機能，土砂流出防止機能，その他にも，地下水の涵養，温暖化の緩和，生態系の保全，文化の伝承，農村景観の保全，などが挙げられる。

含めた検討が喫緊の課題となっている。

このように，農山漁村における地域資源の保全・活用が進まない状況は，局所的な問題ではなく全国的に生じている問題であり，拙稿[4] においても香川県観音寺市五郷地区にて住民意識調査等を実施した。こうした中山間地での課題に対して，近年「コミュニティデザイン」の概念が提唱され[5] 地区住民や想いを持った人々が課題解決の担い手（実践主体）となって地域づくりに取り組む事例が増えている。また，総務省や国土交通省でも「新たな広[6]」や「地域協働体[7]」といった地域づくりにおける新しい担い手像が提唱され，行政組織のみならず，地区住民や地区外の想いを持つ人々のつながりを再構築することで，地域の持続的な問題解決を図ろうとする取り組みが全国的に広がっている。筆者はこうした取り組みを「コミュニティの主体づくり（主体形成）」と呼び，2010 年度から 2012 年度にかけて，先に挙げた観音寺市五郷地区にて地区住民の実践的な取り組みを支援してきた[8]。

本研究においてもその基本的なスタンスは変わらず，香川県農村整備課の研究支援[9] を受けつつ，「コミュニティの主体づくり」を狙いとして，積地区住

3）旧詫間町では，1988 年以降全国で進められたふるさと創生事業の一環で「花いっぱい運動」を実施しており，荘内半島では 90 年代半ばに観賞用の花畑が 5 カ所整備された。現在残っているのは積地区のフラワーパーク（名称はフラワーパーク浦島）のみであり，三豊市の花と浦島イベント実行委員会が詫間町の特産であるマーガレットを中心に，キンセンカ，ポピー，コスモス等，四季折々の花を主に観賞目的で栽培している。かつては，地元住民が休耕田を活用してフラワーパークを運営していたが，従事者の高齢化により，現在（2014 年当時）は花と浦島イベント実行委員会から委託を受けた美咲クラブが運営している。

4）西成典久（2013）「中山間地における地域資源保全に向けた住民意識調査と活用策検討－香川県観音寺市五郷地区を対象として－」，『香川大学経済論叢』87 巻 1・2 号，2014 年 9 月，P. 103-143

5）例えば，山崎亮（2011）「コミュニティデザイン人がつながるしくみをつくる」学芸出版社

6）国土交通省（2011）「国土審議会政策部会国土政策検討委員会最終報告書」

7）総務省（2009）「新しいコミュニティのあり方に関する研究会報告書」

8）五郷地区における「コミュニティの主体づくり」の取り組みは前掲 4 に一部記載しているが，その具体的な取り組み内容と成果については別稿に譲りたい。

9）香川県農村整備課「ふるさと水と土保全対策事業」の研究助成であり，2013 年度から 2015 年度まで香川大学西成研究室が受託した。

民を主体とした実践的な取り組みを支援していきたい。そこで本研究では，まず，積地区における地域資源の現状把握および地区住民の地域づくりに対する意識を明らかにすることを目的とする。そのうえで，地域資源の保全・活用を通じた地域活性化策の検討を積地区住民有志とともに実施し，その内容について整理・考察を行う。

以下，より具体的に，本研究の構成とともに方法を述べていく。２章では，積地区の地理歴史，人口推移，地区の現状と課題を整理する。続いて３章では，地区の活性化に向けた住民の意識調査および地域資源に対する認識をアンケートにより把握する。４章では，前章でのアンケート調査および現地踏査の結果を地区住民にわかりやすく知ってもらうよう，意見交換会を交えたワークショップを開催し，そこでの意見を整理する。５章では，積地区での調査結果を整理し，地域資源の保全・活用に向けた活性化計画をまとめる。そのうえで，積地区におけるコミュニティの主体づくりに向けた実践活動の経過を記し，今後の展望と考察を述べる。

２．積地区の地域概要

２－１．地理・歴史

当該対象地区である積地区は，紫雲出山のふもと，荘内半島の東側に位置し，南には比較的平野部が多く人口も多い大浜地区が立地している。積(つむ)という地名の由来にはいくつかの説があり，船荷の積み下ろしに都合の良い場所であることにちなむという説と，稲荷神が鎮座して田の稲がよく育ち，稲が積むようであるからとも言い伝えられる。[10)]

積地区では自治会は１つであるが，「流（ながれ）」という最小コミュニティ単位が存在しており，それぞれ，南郷，茂広，中筋，黒崎，小久保，新田という６つの「流」が集まって積自治会を形成している。

近世のころは「積浦」と呼ばれ，丸亀藩領であり，荘内組に属していた。丸

10）竹内理三編（1985)「角川日本地名大辞典㊲香川県」角川書店

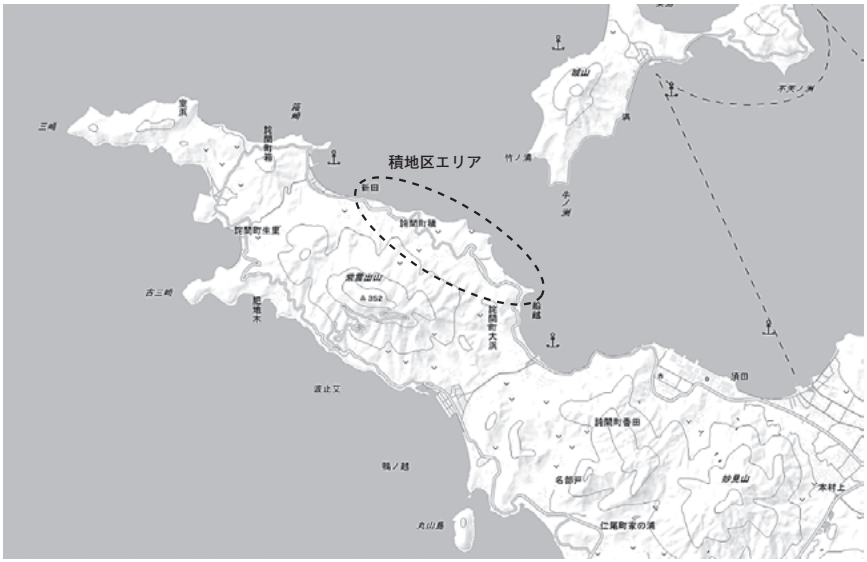

図 1　積地区広域図（地理院地図に一部加筆）

亀から陸路 5 里，海路 4 里 18 町，南は大浜，北は箱浦に接し，波戸があり船泊まりに最も適すると『西讃府志』に記載がある。また，現在においても信仰の篤い花御前祠は倉稲魂命を祀り，中古衰退していたのを天明 7 年伏見の稲荷神社から正一位稲荷大明神の裁許状を受けて再建，それから近隣の尊崇を大いに受けて諸堂完備し，例祭日には多くの参詣人があった。荘内組大庄屋は当村の陶山家が寛延 3 年から務めている。[11)]

明治 8 年には戸数 134・人口 603・反別 31 町余（梶山家文書），明治 24 年には戸数 137・人口 713（男 342・女 371）という記録が残っている。明治 24 年には積簡易小学校，箱簡易小学校，生里簡易小学校が合併して箱浦尋常小学校に，明治 25 年には積浦簡易小学校と大浜簡易小学校が合併して大浜尋常小学校となる。積では各流によって校区が異なっており，北側の小久保，新田は箱

11）　詫間町誌編纂委員会（1971）『新修詫間町誌』詫間町

浦小学校区，南側の南郷，茂広，中筋，黒崎は大浜小学校区であった。しかし，前述したように，箱浦小学校は2013年度に廃校となり，在校生の多くは詫間小学校に通うこととなる。また，大浜小学校においても近年の少子化傾向から詫間小学校への併合が検討されている。

荘内半島に残る浦島伝説を地名と結びつけながら世に発表されたのは1948年のことであった。戦後，観光振興の機運が高まり，郷土史家の三倉重太郎氏により浦島伝説が物語として編纂され，現在まで語り継がれている。

2－2．人口調査

①現状

2010年1月の積地区人口は，男性108名，女性124名，計232名である。（年代別のデータを使用するため，2010年国勢調査のデータを使用した。なお，住民基本台帳によれば，2016年10月現在，積地区人口は216名である。）2010年国勢調査のデータを男女別・年代別に集計し，表1にまとめる。

表1　積地区の年代別人口（2010年1月）

年代	男	女	計
0-9	2	4	6
10-19	11	5	16
20-29	8	7	15
30-39	7	4	11
40-49	10	9	19
50-59	17	25	42
60-69	22	21	43
70-79	17	23	40
80-89	12	23	35
90-99	1	3	4
不詳	1	0	1
計	108	124	232

積地区は全人口 232 名のうち，60 歳以上が 122 名で全体の 52.6％を占めている。ちなみに日本全体では 60 歳以上が全人口の 32.4％（2012 年），三豊市では 39.3％（2010 年）である。また，20 歳未満は 22 名で全体の 9.5％となっており，積地区の少子高齢化の現状が見て取れる。

続いて，積地区の人口状況をより把握するために，三豊市全体の年代別人口とグラフにて比較する（図 2）。

このグラフからも明らかなように，積地区は三豊市全体と比較して 40 歳代以下のいわゆる子育て世代と若年世代の人口が少ないことがわかる。割合でいえば，49 歳以下の人口でみれば，積地区は全人口の 28.9％であるのに対し，

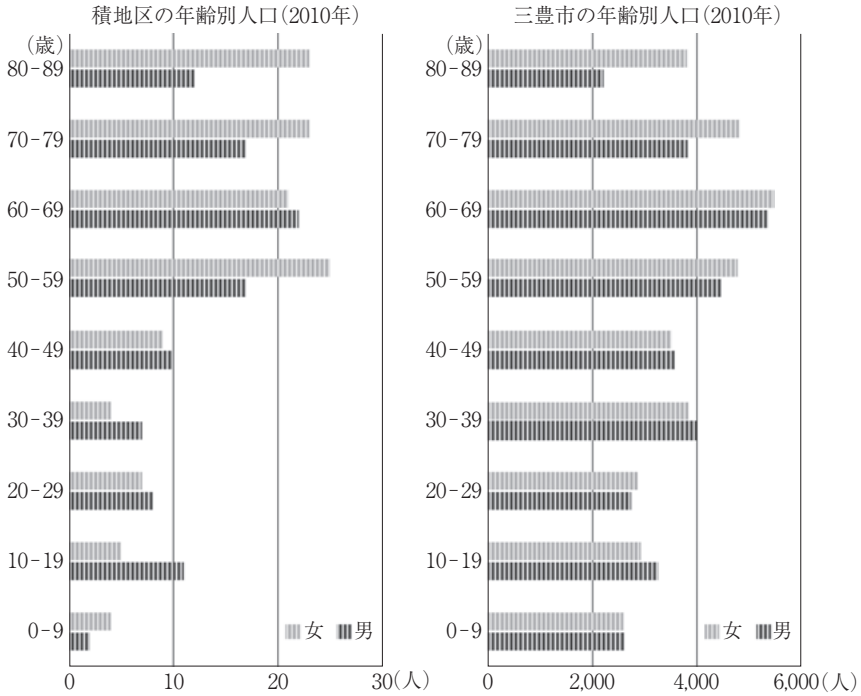

図 2　積地区と三豊市の年代別人口比較（2010 年 1 月）

表 2　荘内半島の地区別人口（2014 年 1 月）

区名			男	女	合計
荘内半島	大浜	名部戸	86	101	187
		鴨之越	30	44	74
		大浜	322	364	686
		波止艾	34	51	85
		肥地木	85	93	178
		船越	72	70	142
		伊砂子	62	71	133
	積	積	105	118	223
	箱	箱	150	158	308
	生里	生里	118	123	241
		仁老浜	78	69	147
合計			1,142	1,262	2,404

三豊市では 47.1%を占めている。ちなみに，日本全体でいえば，49 歳以下の人口は全人口の 55.3%（2012 年）を占めており，積地区は，日本の中山間地域にみられる典型的な少子高齢の人口構成となっている。

続いて，荘内半島全体の地区別人口を住民基本台帳から把握し，表 2 に整理した。2014 年 1 月現在の積地区の人口は，男性 105 名，女性 118 名の 223 名である。また，荘内半島で最も人口の多い地区は大浜であり，男性 322 名，女性 364 名の計 686 名，最も人口の少ない地区は鴨之越であり，男性 30 名，女性 44 名の 74 名である。大浜地区を除けば，荘内半島には 100～300 名程度の集落が 10 地区存在している。

②人口推移

続いて，積地区のここ 10 年程度（2000 年～2010 年）の人口推移をみていく（図 3 ）。ここでも年齢別のデータを使用するため，国勢調査のデータを使用した。

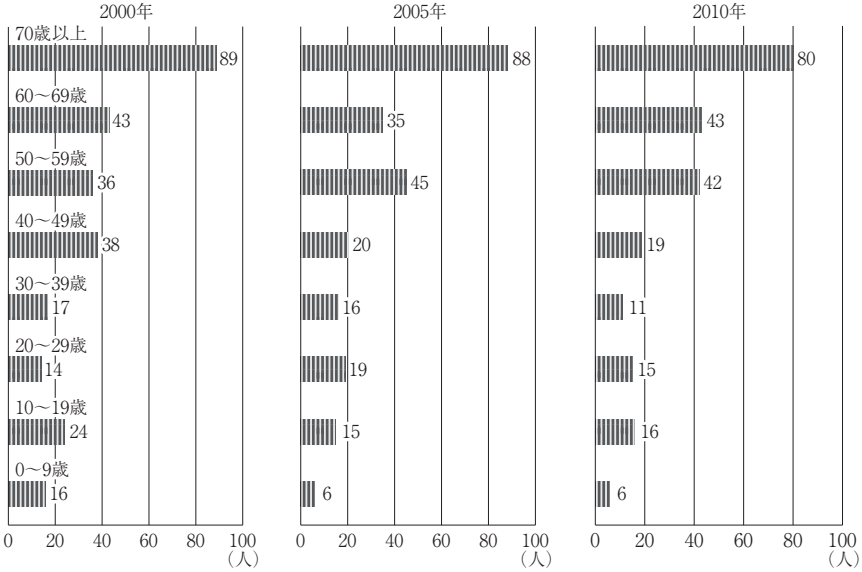

図 3　積地区年代別人口の推移（2000 年-2010 年）

積地区全体の人口推移でいえば，2000 年の 277 名に対し 2010 年は 232 名となり，ここ 10 年で 45 名（16.2%）の減少となっている。また，年代別人口でみれば，0～9 歳の割合は 2000 年に 5.8%，2005 年には 2.4%，2010 年には 2.6%であった。また，40～49 歳の割合は 2000 年 13.7%，2005 年 7.9%，2010 年 8.2%となっており，特に 2000 年から 2005 年にかけて 40 代人口の減少が著しい。

また，50 歳以上の割合は 2000 年 60.6%，2005 年 66.1%，2010 年 71.1%となっており，その割合が年々増加しているのがわかる。

続いて，より長期的な人口推移をみていく。積地区に限定した長期的な人口データは取得できなかったため，ここでは 1920 年から 2010 年までの旧詫間町の人口推移と三豊市の人口推移を国勢調査のデータから把握し，図 4 と図 5 のグラフで示す。

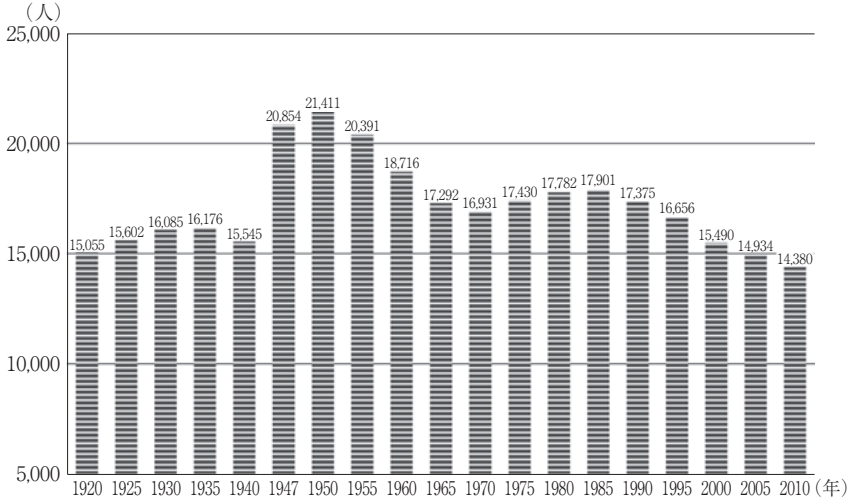

図 4　旧詫間町の人口推移（1920 年-2010 年）

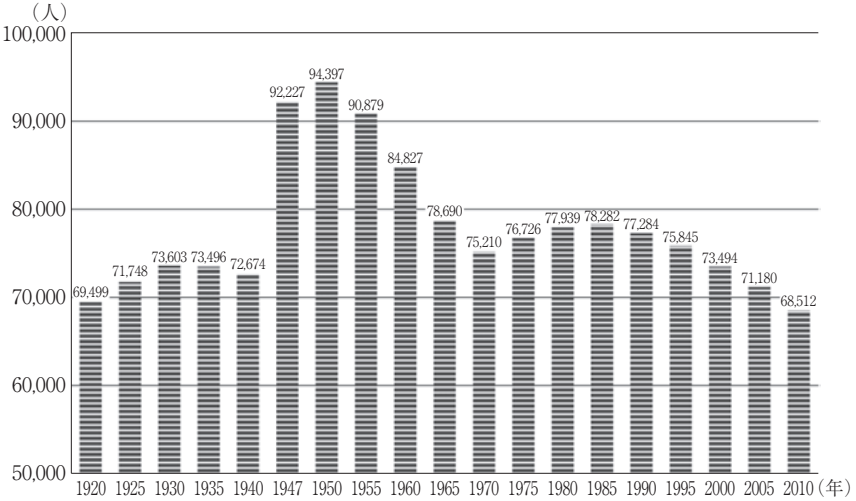

図 5　三豊市の人口推移（1920 年-2010 年）

旧詫間町の人口は戦後増加し，1950年に最も多い21,411名となった。その後は高度経済成長期に入り人口は急激に減少するが，1970年代に入ると旧詫間町を中心として工場等の産業を誘致し，人口は増加に転じるも，1985年をピークとしてその後は現在に至るまで減少傾向が続いている。2010年には最も人口の多かった1950年の約3分の2にあたる14,380名となっている。

三豊市の人口も戦後増加し，1950年以降急激に人口が減少するものの，1970年に下げ止まり，その後は1985年まで緩やかな増加を経て，その後は現在まで減少傾向が続いている。旧詫間町と三豊市の人口推移はほぼ同様のカーブで推移していることがわかる。

2－3．地域を取り巻く現状と課題

積地区の住民や周辺団体等へのヒアリング調査の結果，積地区を取り巻く現状と課題については，以下のようにまとめられる。

・集落としての環境維持の問題

農地の荒廃，空き家の増加，山道の管理不足，こうした現象が現在の積地区の問題として挙げられる。集落としての機能を維持するための環境問題は，少子高齢過疎化が加速度的に進んでいる状況，および，農業を中心とした主幹産業衰退に伴う20～40歳代の人口流出，こういった点が主な原因として挙げられる。明治中頃までは稲作が盛んであったが，減反政策により，跡地を利用した花作りが盛んになった。50年前は除虫菊の収益が高かったが，外国や沖縄など外部から花が輸入されるようになって菊は負けてしまい，更に高齢化が進み後継ぎもいないことから農地は廃れていった。何とか農地を保たなければとフラワーパークを始めたものの，そこの運営も高齢化で管理が困難となり，現在はみさきクラブ（有償ボランティア）に管理を任せている。

・集落としての生活機能の問題

少子高齢過疎化が進展することにより，小学校の廃校，商店の消失，高齢者へのケア不足などの問題が生じている。

これまで積地区の小学生が通っていた箱浦小学校（生徒数 16 名）は 2013 年度で廃校となる。廃校後，箱浦小学校の生徒たちは最も近い大浜小学校に通うという話が出ていたが，大浜小学校も後々廃校となる可能性があり，また，コミュニティバスを利用しての通学となるため，最初から設備の整った詫間小学校へ通うこととなった。

また，以前 3 件あった商店も，現在はなくなっており，車で 6 ～ 7 km 離れたスーパーまで買い物に行かなければならない状況となっている。とはいえ，移動販売車（生協となみちゃん号）が週 2 回来ており，住民の利用も多いという。

3．地域資源に関する住民意識調査

3－1．住民アンケート調査概要

本調査では，積地区住民の積に対する問題意識や地域資源の認識を知るため，全世帯を対象としたアンケート調査を実施した。アンケート調査の概要は以下の通りである。

・アンケート対象者：積地区全世帯（回答者は各世帯代表者 1 人）
・調査期間：2013 年 12 月 1 日～12 月 20 日
・配布回収方法：各流の自治会役員に配布回収を依頼

アンケート調査は記述式を中心として構成し，具体的な質問項目は以下の通りである。

積地区地域資源アンケート調査内容

①　ご自身についてお伺いします。
⑴　性別　　（　男性　・　女性　）
⑵　年齢　　（　　歳）※2013 年 12 月 1 日時点での年齢

⑶　同居人数　（　　人）※1つの家にお住まいの人数
⑷　所属している地区（流）の名前　（　　）

②　積地区の現状についてお伺いします。
⑴　積地区の現状は，以下のどれにあてはまると思いますか？　以下のうち，１つお選びください。
５．非常に危機的　（すぐに対処しなければならない問題がある）
４．危機的　（大きな問題が出始めている）
３．やや危機的　（小さな問題はあるが，大きな問題があるわけではない）
２．なんとなく不安（気になる小さな問題が出始めている）
１．健全な状態　（危機的状況はなく，それほど問題も見えない）

⑵　現在の積地区では，どのような問題があるとお考えですか？　箇条書きでご記入ください。
例：空き家が増えている，農地の荒廃，祭事の担い手がいない，など

⑶　それでは逆に，積地区にはどのような魅力があるとお考えですか？　箇条書きでご記入ください。（住んでいて“いいなぁ”と思うところ，積地区を訪れた人々にご紹介したい魅力，など）

③　積地区の食と農についてお伺いします。
⑴「積地区ならではの味覚」と言えば何でしょう？（料理名・食材・調理法など箇条書きでご記入ください）
例：〇〇で採れたみかん，郷土料理（さつま），よくでる晩御飯のメニュー，など

⑵　農業を営んでいる世帯（自家用も含む）の方にお伺いします。
　現在，どのような作物（果樹，園芸含む）を作っていますか？　箇条書きでご記入ください。また，特に収入を得るために出荷している作物があれば，以下にご記入ください。

④　積フラワーパークについてお伺いします。

⑴　積フラワーパークは徐々に管理するメンバーが減っており，現状維持も難しい状況になっています。こうした現状に対して，あなたはどのようにお考えでしょうか？　以下のうち，１つお選びください。

５．自主的に解決に向けた取り組みを企画し，実践していきたい（あるいは実践している）

４．積極的に解決に向けた取り組みに参加したい(あるいは参加している)

３．できる範囲で解決に向けた取り組みに参加したい（あるいは参加している）

２．高齢化している状況では現状維持もやむを得ない

１．フラワーパーク以外に解決すべき課題があるので，フラワーパークに対しては消極的

⑵　今後，あなたはどのような積フラワーパークを望みますか？（箇条書きでご記入ください）

例：フラワーパークの規模を拡大したい，カフェをつくりたい，産直市をつくる，など

⑤　今後宣伝していきたい積地区の魅力についてお伺いします。

⑴　積地区でオススメの場所や風景，積地区の魅力など，自由にご記入ください。(箇条書きでご記入ください)

例：〇〇から見る風景，伝統的な祭事，など

⑵　積地区に伝わる祭りや風習，民話や伝説があれば教えてください。(箇条書きでご記入ください)

例：獅子舞，雨乞い，浦島伝説など

⑶　積地区，もしくはご家族の中で，特技や技能をお持ちの方がいらっしゃれば，ご紹介ください。

例：料理名人，芸能名人，押し花名人，地区の歴史に詳しい人，など

⑥　積地区のこれからについてお伺いします。

⑴　10年後，どのような積地区を望みますか？

積地区が向かうべき道筋，これからの積地区に必要なことなど，ご自由にお書きください。

⑵　これからの積地区を皆で一緒に考える会があるとすれば，そうした活動にあなたは参加したいですか？（1つお選びください）

1．積極的に参加したい
2．可能なかぎり参加したい
3．興味はあるので情報はほしい
4．あまり興味がない

3-2．アンケート調査の結果と考察

続いて，前項で示したアンケート調査の結果を示していく。まず，アンケート調査対象の全102世帯のうち，アンケート配布可能な84世帯（南郷16　茂広12　中筋17　黒崎24　小久保7　新田8）を対象としてアンケートを配布した。結果，63世帯の回答を得た。回収率は75％となった。

以下，調査項目毎に調査結果を示していく。

①アンケート回答者の属性

アンケート回答者の各流毎の男女別人数，および年代別人数，世帯構成人数の結果を表3～5に示す。

アンケートには各流からまんべんなく回答いただき，年代別でみれば，60歳代の方が最も多く（回答者の3分の1），40歳代以下は4人の回答となった。50歳代から80歳代までの方で58人（回答者の約9割）を占めている。

続いて世帯構成人数でみれば，回答者のうち最も多い世帯は2人世帯であった。1世帯当たりの人員を平均すれば，世帯人数は2.35人であった。1世帯

表 3　アンケート回答者の男女別人数

地区名	男	女	無回答	計
南郷	8	6	0	14
茂広	3	4	0	7
中筋	2	9	1	12
黒崎	10	7	0	17
小久保	3	3	0	6
新田	5	2	0	7
計	31	31	1	63

表 4　アンケート回答者の年代別人数

10 代	0
20 代	1
30 代	0
40 代	3
50 代	10
60 代	21
70 代	10
80 代	17
90 代	0
無回答	1
計	63

表 5　アンケート回答者の世帯構成人数

0 人	2
1 人	15
2 人	22
3 人	12
4 人	7
5 人	1
6 人	3
無回答	1
計	63

当たりの人数は，香川県では 2010 年現在で 2.55 人，全国では 2.59 人であり，平均を少し下回っている状況である。

②積地区の現状について

(1)　問題意識度数

積地区住民による積地区に対する問題意識の程度（問題意識度数）は以下の結果となった（図 6）。

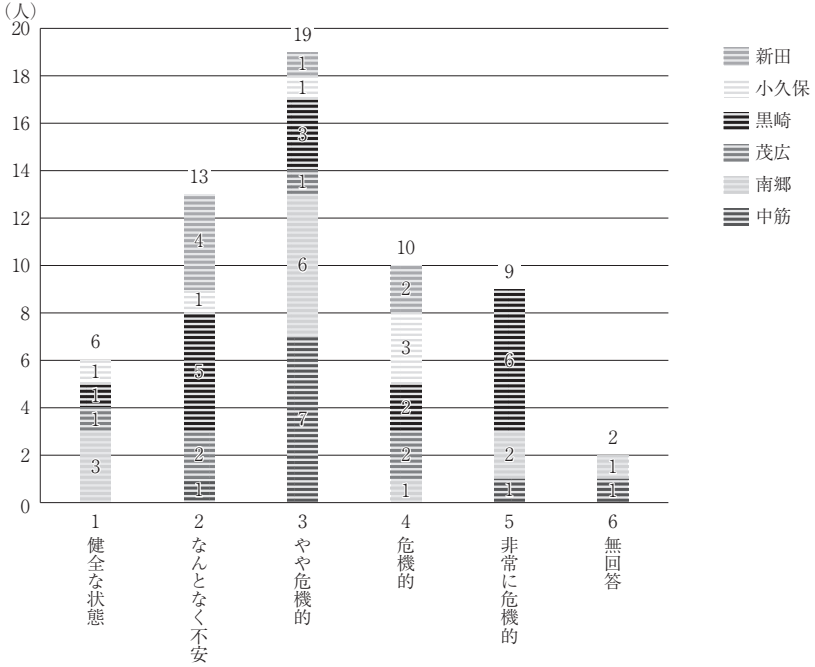

図 6　積地区に対する住民の問題意識度数（地区別）

総数では選択肢 3 の「やや危機的」が最も多く（計 19 人），次いで選択肢 2 の「なんとなく不安」（計 13 人），選択肢 4 の「危機的」（計 10 人）の順となった。また，無回答を除いた回答者の問題意識度数を平均した度数は 3.2 となり，積地区住民の平均的な問題意識は「やや危機的」よりも少し危機的状況にあるという認識にあることがわかった。なお，同じ調査項目を香川県五郷地区で試みたところ，五郷の平均問題意識度数は 2.8 となり，[12] 五郷地区と比較してみると積地区の方が平均的に問題意識度は高いという結果となった。

12）　前掲 4 参照

(2)　積地区で感じる問題（自由記述）

この問いは自由記述のため，結果をキーワードで抽出して集計したところ，以下のような結果を得た（図７）。

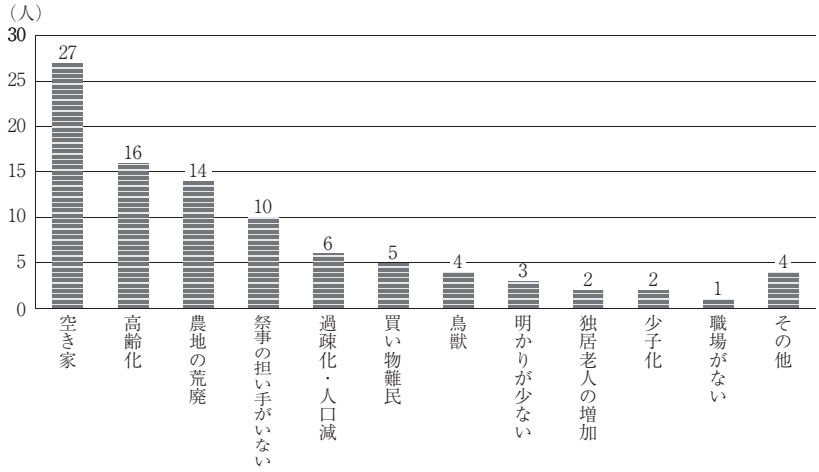

図７　積地区にどのような問題があるか？

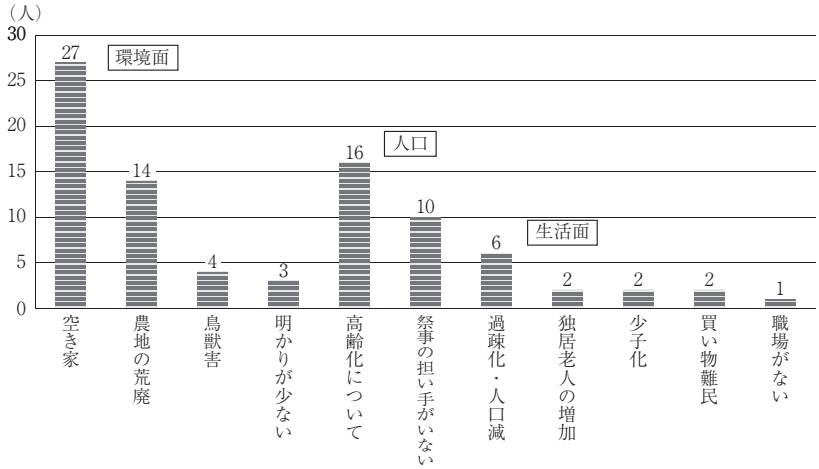

図８　積地区にどのような問題があるか？（種別ごと）

アンケートでは「空き家」に関する問題記述が最も多い回答となり，全回答者の半数近くが問題として挙げている。続いて，「高齢化」に関する記述が多く，３番目には耕作放棄地の増加や後継者不足などによる「農地の荒廃」が問題であるとする回答者が多かった。これらの結果を問題種別ごとにグルーピングすれば図８のように示せる。

問題として抽出したキーワードを種別ごとに分類した結果，「空き家」や「農地の荒廃」といった『環境面』に対する問題点が最も多く挙げられた。次に「少子高齢化」や「過疎化・人口減」といった『人口』について，そして「買い物難民」，「職場がない」といった『生活面』に対する問題点が挙げられた。

(3)　積地区で感じる魅力（自由記述）

前項と同様に，自由記述の回答からキーワードを抽出して集計し，以下の結果を得た（図９）。

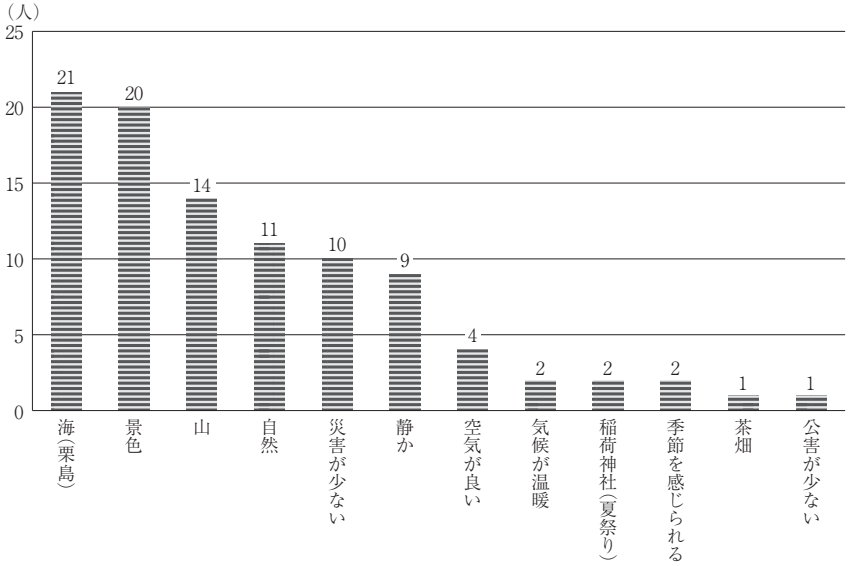

図９　積地区にどのような魅力があるか？

多くの回答者が海や景色，山といった景観の魅力を挙げていた。「海」と答えた回答者の多くは，積地区から見える粟島の風景がきれいだと回答していた。また，災害が少ないこと，静かであること，といったように住環境に対する回答が目立った。

③積地区の食と農について

⑴　積地区ならではの味覚について（自由記述）

この項目についても自由記述のため，結果をキーワードで抽出して集計したところ，以下のような結果を得た（図 10）。

積地区ならではの味覚として，「さつまいも」，「さつま」や「ぼっかけ汁」が多く挙げられた。その他にも多種多様な味覚が挙げられているが，ここで特筆すべきは，どれか１つの食に集中することなく，多様な積ならではの味覚が挙げられている点である。積ならではの味覚に対して統一したイメージを住民の

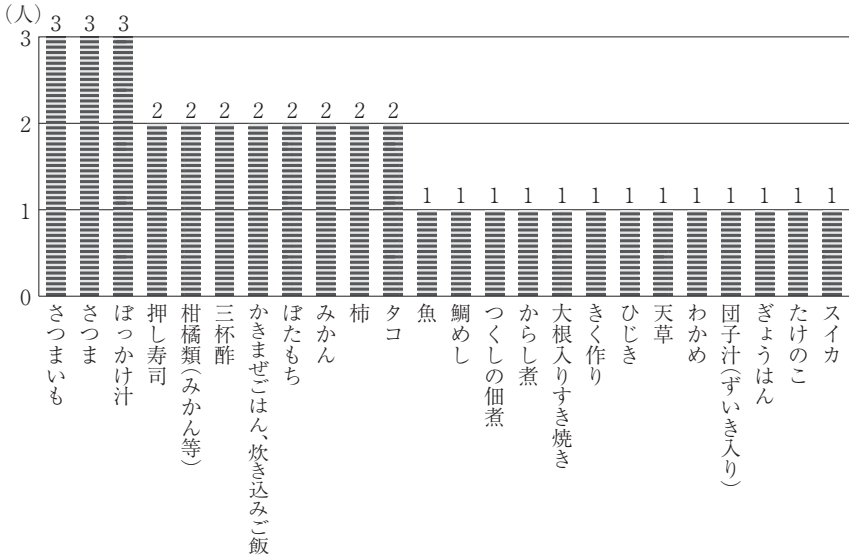

図 10　積地区ならではの味覚

方々が持っていない，とみることもできるが，多くの食が存在していると捉えることもできる。

⑵　積地区で作っている作物（果樹，園芸含む）（自由記述）

回答いただいた作物を集計し，「野菜」「果物」という種別ごとに並び替えをし，図 11 の結果を得た。

作物としては「大根」，「玉ねぎ」，「じゃが芋」が特に多く挙げられている。また，みかん，柿などの「果物」が一部挙げられているが，総数では「野菜」が最も多くなっている。作っている野菜の種類も非常に多く，様々な種類のものが作られていることが分かる。

続いて「収入を得るために出荷している作物」について聞いたところ，「菊」「みかん類」が挙げられている。また，黒崎地区では花卉栽培を行いたいという声も挙がっている。

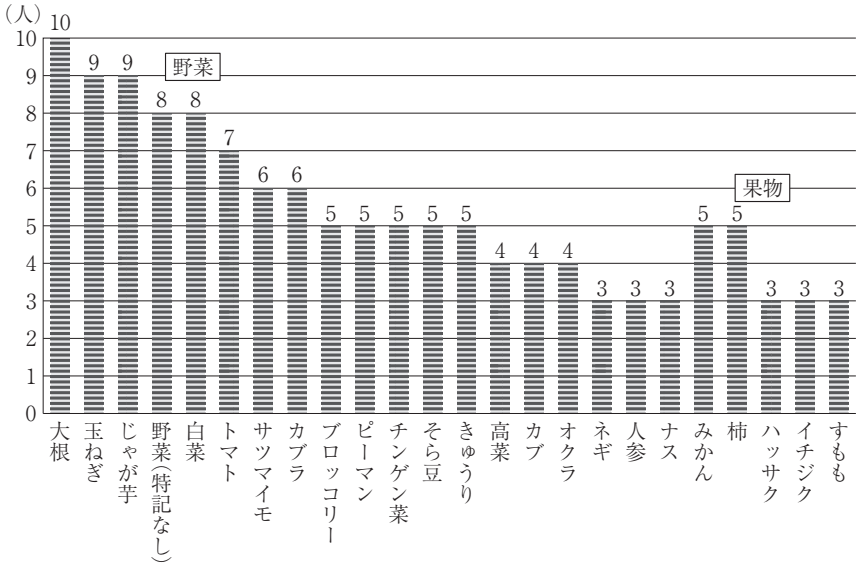

図 11　積地区で作っている作物（種別ごと）

④積フラワーパークについて

⑴　積フラワーパークの現状について（選択式）

高齢化により管理運営が困難になっている積フラワーパークについて，今後どのように考えていくべきか，選択式で回答を集計し，図 12 の結果となった。

積フラワーパークの現状について 5 段階で聞いたところ（3-1. 参照），選択肢 2 の「高齢化している状況では現状維持もやむを得ない」と回答する人が最も多く，半数近くに及んだ。続いて，選択肢 3 の「できる範囲で解決に向けた取り組みに参加したい（あるいは参加している）」といった回答が多く，やりたいという気持ちはあるものの，実際に管理運営に関わるのは難しいという回答者が多かった。

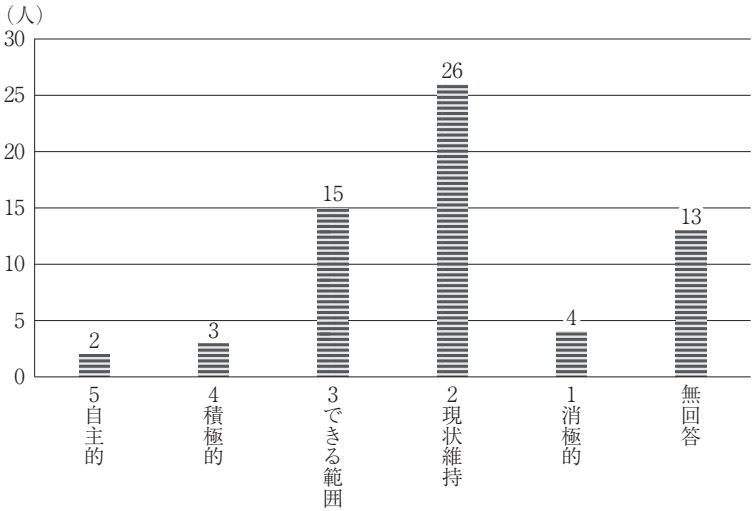

図 12　積フラワーパークの現状をどのように考えるか？

⑵　積フラワーパークの今後について（自由記述）

積フラワーパークの今後の活用方法について自由記述で回答を求めたところ，多様な回答を得られた。多かった回答として，「良心市の開催」「産直日曜

市」「休憩スペースの設置（カフェ，ベンチ等）」「ハーブなど利益を生む畑としての活用」「獅子舞の定期開催」「積稲荷神社の PR」「トイレの設置」「駐車場の拡充」などが挙げられる。

また，なかでも「一年中花が咲いている状態にしたい」という意見が数多く寄せられ，来訪者が積地区に花を見に来てくれるのにそのときに花がないという状況をなくしたい，という意見が目立った。

⑤今後宣伝したい積地区の魅力について

⑴　積地区でオススメの場所や風景，魅力（自由回答）

お勧めの場所や風景，魅力について自由記述で回答してもらい，キーワードを抽出・集計し，図 13 の結果となった。

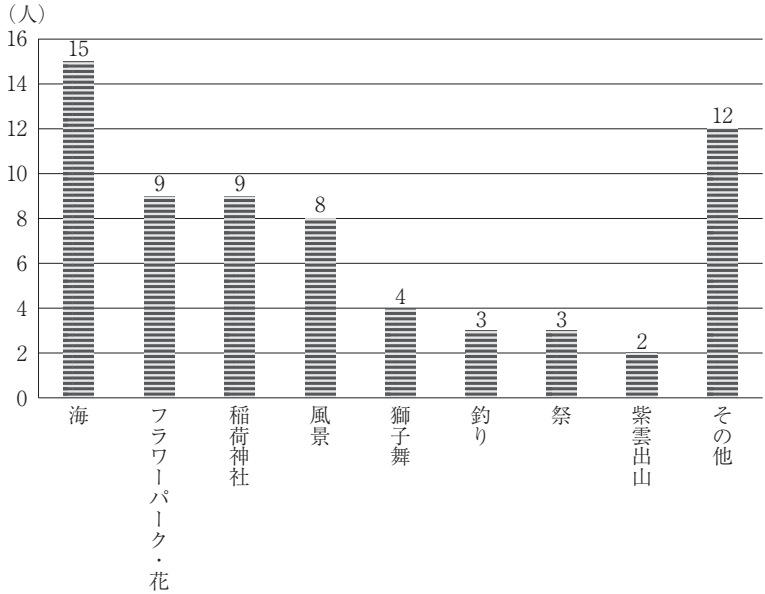

図 13　積地区でオススメの場所・魅力

積地区のオススメの場所・風景としては，「海」という回答が最も多く，次いで「フラワーパーク・花」といった意見が多く挙げられた。また積稲荷神社や獅子舞という意見も多く，稲荷神社で行われる祭に関する回答も多く挙がった。その他としては，百々手やお接待，海水浴，盆踊りなどが挙げられた。

⑵　積地区に伝わる祭りや風習，民話や伝説など（自由回答）

積地区の祭りや風習，民話伝説について自由記述で回答いただき，結果をまとめたところ，図 14 の結果となった。

最も多かった回答が「獅子舞・秋祭り」で，全回答者の半数近くが回答しており，積地区を代表する祭りであることが窺える。続いて「稲荷神社大祭」が多かった。獅子舞は住民の中でも注目度は高く，地区によって舞い方が異なる。

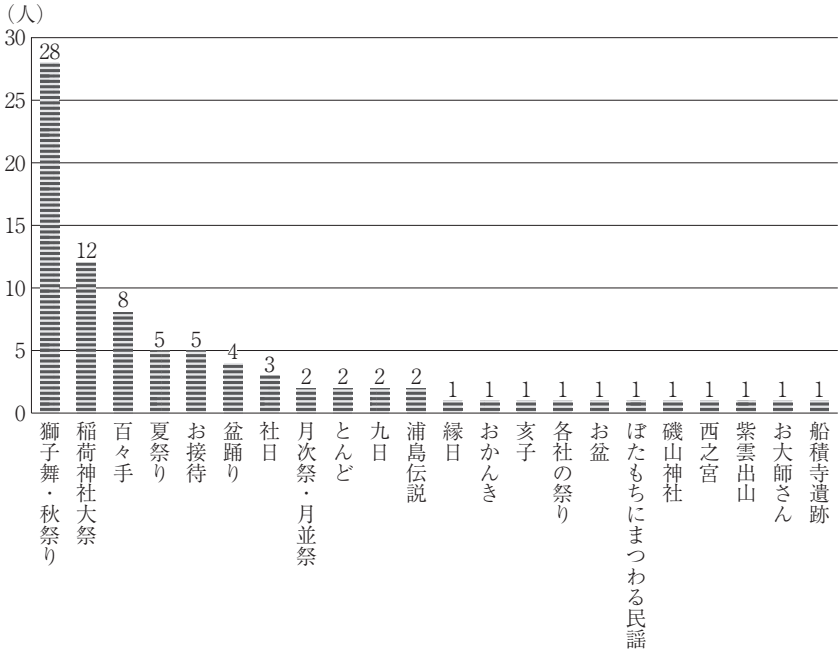

図 14　積地区に伝わる祭や風習，民話や伝説など

また，獅子舞，稲荷神社大祭，百々手以外でも，月並祭，とんど，おかんき，ぼたもちの民謡など，非常に多くのお祭りや民間伝承が挙げられており，こうした無形文化が数多く伝わっていることも積地区の特徴として挙げられる。

⑶　積地区在住の特技や技能をお持ちの方（自由回答）

ここでは個人名は避けるが，順不同で示せば，以下のような名人が挙げられた。釣り名人，漁の豊富な知識人，歴史に詳しい人，歌名人，自然の物を利用した工作・手芸名人，子供講座講師，彫刻家など。

⑥積地区のこれからについて

⑴　10 年後，どのような積地区を望みますか？（自由回答）

この質問項目に対しては様々な意見が寄せられたが，内容を集約し，「生活

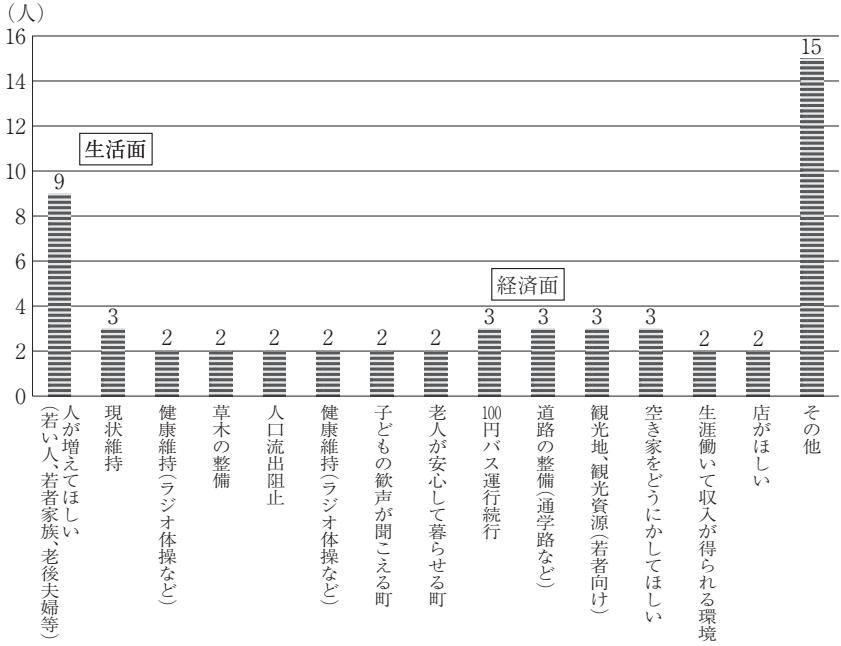

図 15　10 年後，どのような積地区を望むか？

面」「経済面」でグルーピングを行い，図 15 の結果となった。

それぞれ回答項目を「人が増えてほしい」,「老人が安心して暮らせる町」などは『生活面』，続いて「100 円バス運行続行」,「道路の整備」などは『経済面』としてグルーピングした。全体の回答傾向としては様々な意見がだされているが,「人が増えてほしい（若い人，若者家族，老夫婦等）」という声が共通して最も多く，続いて「現状維持」と回答した方が多かった。「子供の歓声が聞こえる町」といった声も挙げられており，小学校が廃校となり町の活気が少なくなっている様子が窺える。少子高齢化が進む積地区において，子供や若者が暮らし続けられる環境をどのように生み出すかが大きな課題となっている。

その他としては,「伝統行事を続けたい」「移住者を呼び込む」「山野草がとれる山の整備」などの意見が挙げられた。

⑵　これからの積地区を考える会への参加意向（選択式）

「これからの積地区を皆で一緒に考える会があるとすれば，そうした活動に

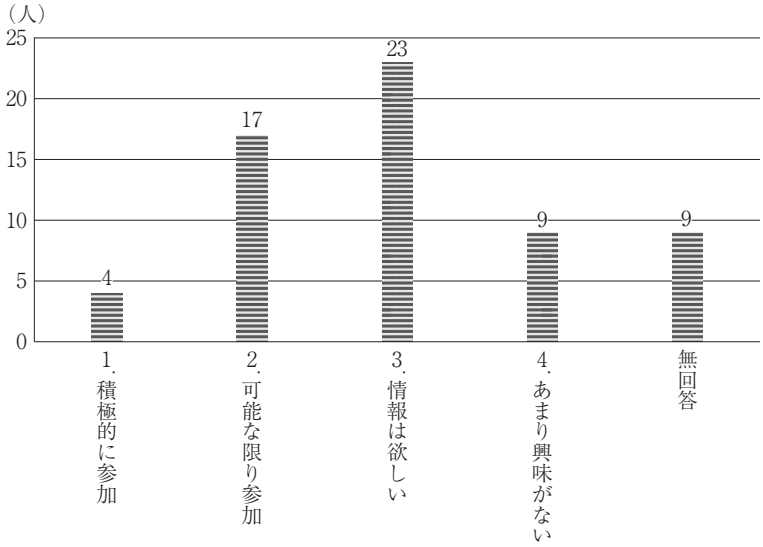

図 16　これからの積地区を考える会への参加意向

あなたは参加したいですか？」という問いに対して選択式で回答を集計し，図16の結果となった。

積地区の将来を考える活動に参加したいかについては，選択肢3の「興味はあるので情報はほしい」という回答（計23人）が最も多く，続いて選択肢2の「可能な限り参加したい」の回答（計17人）が多い結果となった。全体を通じて，何らかの形で情報を得たいという人が全回答者の7割となっており，今後の積地区に対してほとんどの人が関心を示していることが分かった。

以上，積地区住民アンケート調査の結果を示した。

4．アンケート報告会と住民意見交換会の実施

本章では3章で調査した住民アンケートの結果をもとに，住民の方々に対するアンケート報告会と住民意見交換会（ワークショップ）を実施し，その内容を整理する。

4-1．アンケート報告会と住民意見交換会の実施

①アンケート報告会の開催

アンケート調査終了後，直接，住民の方々にアンケート結果を伝えるのと，結果に対する率直な意見を聞くために，アンケート報告会を開催した。報告会の概要と参加者の感想について，以下に整理する。

写真 1　アンケート報告会の様子（筆者撮影）

≪地域資源アンケート報告会概要≫
日時：2014年2月1日
場所：三豊市詫間町積地区集会所
参加者：積地区住民（25人），香川県農村整備課担当者，西成研究室（9人）

【発表内容】
・積地区人口調査報告
・積地区地域資源アンケート結果報告

【アンケートの結果発表を受けた感想等】
人口調査を受けて
・年代別のグラフで結果を見ることで，想像している以上に高齢化が進んでいることをより感じることができた。
・思った通り人口が少なくて，数年後・将来がどうなるか不安。
・50 代では若い方で 80 代の人が多い。
・自分が考えていたのと平均的に同じ結果であった。

祭について
・積において百々手祭は現在では簡易化されているが伝統的なものである。
・稲荷の祭りや獅子舞等には他地域から若い人が手伝いに来てくれる。
・稲荷神社の祭りは夏祭り以外にも春・秋にも行われる。
・商売繁盛を祈願しに県外からもたまに人が来る。
・お祭りなどは他の地区に住む方が戻ってきて手伝ってもらっている。自分たちだけで行うことは難しい。

空き家について
・空き家がどんどんと増えるのでは，という不安。
・一世帯空き家に住んでくれる家族が出たことがうれしい。
・空き家対策は他力本願な部分がある。　→移り住む人次第。
・空き家対策を進めていく必要があるが積に来るメリットがあまりないのでは。
　→お店と学校がない。逆に，景色や気候は魅力だが。

若年人口の減少について

・若い人に定住してもらうのは困難だが，来てもらう人を増加させることは考えていける。
・春に５人家族が引っ越してくるので楽しみにしている。その家族は特に知り合いがいるわけではないが積の土地が気に入ったそうだ。
・現在は，集団下校もできないほど子供が減っている。遊ぶにも車で送って友達の家にいかなければならない。
・親の通勤時に車で学校まで送り，帰りに子供を迎えて帰宅することが多く，平日の昼間は地区に子供がいない。
・昔は山や海，神社など外で遊んでいた。週に一回紙芝居が来てみんなで集まって聞いていた。子供の声が聞こえて賑やかであった。

小学校について

・学校がなくなってしまっては厳しい。学校は地区の中心だと考えている。学校で行われる運動会などは子供より保護者の方が多い。
・子供が他の小学校に入学するのがさみしい。

食べ物について

・ぼっかけ汁とぎょうはんは同じ食べ物である。
・さつまとは赤味噌を使った白身魚の料理であり，よく作っている。
・さつまは味噌で煮ているためこってりとしている。昔は，白米が食べられずムギを食べていたので，どちらを食べたかわからないようにするため，味が濃い汁をかけて食べていた。
・この辺りではフグ，サバ，ナマコがよく釣れるそう。ナマコは寒い時期，探さなくても砂浜にうちあがっているため取りやすい。

環境について

・新田からみた景色は綺麗なのだが，最近はヤブが生い茂って見えにくくなっている。

・狩猟をしに県外からも人がくるのだが，猟犬がその辺をうろついていると怖いのであまり知らない人は来てほしくない。
・イノシシやサルなどの獣害が深刻。作物を育てる意欲が下がっている。
・昭和30年代頃は，除虫菊（蚊取り線香の原料）を作っていたが今は花を作っている人はほとんどいない。

フラワーパークについて
・フラワーパークがさみしい。
・管理が大変であるが小規模の施設ばかりではどうしようもない。
・フラワーパークの管理は積の人ではなく箱の人がしている。

環境面
・積のために何かやりたいと思っている人々は多いのでまだ見通しはある。しかし，高齢化で参加したくてもできないことがある。
・若い人がリードして引っ張ってもらいたい。
・若い人が帰ってきやすい環境が必要だ。
・気持ちはあるが，体がついていかない。（将来の活動）

その他意見
・危機感を持っている，という現状から次は何ができるかを考えたい。
・紫雲出山の遊歩道をどうにかしたい。
・家庭菜園をちょこちょこやっている。 →土日限定で産直市をやってみては。
・人口が減っているから，１軒あたりの自治会費など負担が大きくなっている。収入を生むような活動も考えていきたい。
・積の人が無理なく楽しくできること。一時的でなく長期的に。
　→個人よりも積全体として何かをすれば行政の対応も変わってくるのでは。
・目標（何年後に～）などを持って行動する。
・他力本願ではなく，自分たちがなにかやらなければ。
・よそ者が自治会のルールを守ってくれるか心配。

②住民意見交換会（ワークショップ）の実施

アンケート報告会終了後，続いて住民の方々が気軽に話し合えるようグループに分かれて意見交換会(ワークショップ)を実施した。１章で記したように，本研究では「コミュニティの主体形成」を狙いとしているため，今後，地区住民の方々が中心となって地域づくりを進めていくためにも，まずはこうした意

写真 2　コミュニティの主体形成を狙いとしたワークショップの様子（筆者撮影）

見交換会を通じて，積地区の課題解決に向けた主体的な意識を養うことを狙いとしている。以下に意見交換会での意見内容をまとめる。

＜具体的にどんなことができるか（積でやりたいこと）＞

フラワーパークについて
・レイアウトや運営を見直す。
・花の栽培方法をその道のプロの方に教わって定期的に整備したい。
・しいたけやエンドウ豆などをつくって収入源にしたい。
・積の HP を作り，祭やフラワーパーク等の宣伝を行いたい。
・フラワーパークに植える花を四季折々のものにする。
・観光シーズンに産直市場やうどん屋を開き参加する。
・冬はイルミネーションをすればいいのではないか。（花がない時期に魅力を）
・行政に任せるのではなく，ボランティアなど多くの人の協力が必要。
・背の低いコスモスのほうがきれいなのでそちらにすればいいのでは。

環境整備（人的側面）について
・空き家に入ってきた人が自治会に参加しやすいようなルール作り。
・U ターンを増やす。リタイヤした人たちが戻ってくる。（老人の村）
・子供や孫が一緒に住める場所づくり。
・毎年行っているお接待をより盛り上げる。
・賑やかになってほしいけれども，静かな平穏な生活も守りたい。

環境整備（建設面）について
・近所の人でも散歩の途中でランチやお茶ができるカフェを開く。
・空き家を改装して海辺でカフェを開くのもいいのではないか。
・きれいなトイレをつくりたい。
・消防屯所の横の空き地を利用して地域の人の集まれる場にしたい。
・太陽光発電をする。

紫雲出山関係
・現状，倒木が遊歩道をふさいでおり，30 年ほど前からどれも通っていない。
・昔は住民の人達が畑の堆肥や薪を取っていたため，自然と遊歩道が整備されていた。今はそういう人も少ないため，荒廃が進んでしまったと思われる。
・遊歩道途中ではワラビがたくさん生えている。
・遊歩道を整備すれば住民の健康維持にもつながるのではないか。

獅子舞について
・獅子舞フェスティバルへの参加。（2 年連続で不参加が続いている）
・獅子舞の練習を見に来る人を増やす。　→自分達も獅子舞の練習を見に行く
・暑い時期に 1 ヶ月も前から準備を始める祭りをより活気のあるものにすべき。

貸農園の開催
・外部の方に畑を貸して，その管理は積地区の人がする。
・トマト狩りをする。長持ちしやすい野菜を選ぶ。（ex. 大根）

その他
・流によっては行っている花見の回数を増やす。
・軽トラックで屋台をして地区内を回るのもいいかもしれない。
・草抜きなど自分がやれることをやっていくべき。
・産直市場を開催する。（土日，観光シーズン）

③意見交換会終了後の地区内周知活動

今回実施したアンケート報告会および意見交換会には仕事や家庭の事情で参加できなかった方々も数多くいるため，そうした方々にも今後関わりを持ってもらうためにも，まずはどんな話し合いの状況でどんな内容が話し合われたのか，しっかりと知らせていく努力が必要となる。そこで，本研究では『積しんぶん』という名称で新聞を作成し（図 17 参照），これを全世帯に配布していただくよう自治会にお願いした。

会に参加した人のみで積地区全体の地域づくりを進めていくことは困難であり，仮に参加者のみで何かを実行したとしても，その他の地区住民からは不満や反発がでてきてしまう。地区全体で進めていくことをメッセージとして伝えるためにも，こうした紙媒体を通じた地区住民とのコミュニケーションはコミュニティの主体形成において極めて有効に働く。

図 17　アンケート報告会と意見交換会の様子を伝える『積しんぶん』

5．まとめと考察

本研究では，2013 年度に実施した積地区地域資源アンケート調査を中心として，積地区における地域資源の現状や地区住民の地域活性化に向けた住民意識を明らかにし，その後の意見交換会も踏まえて，地域資源の保全活用策を検

討・整理した。最後のまとめとなる本章では，まず，本研究の成果をもとに住民有志と積地区の地域活性化計画を検討・整理する（5-1.）。そのうえで，活性化計画の実施主体についてその後の経過を記すとともに，コミュニティの主体形成を狙いとした実践活動の成果と今後の展望を考察していく（5-2.）。

5－1.本研究の成果と地域活性化計画の検討

本研究では，積地区の歩んできた歴史と地域の概要，および，人口構成・人口推移を把握したうえで，積地区における地域資源の現状把握および地区の活性化に向けた住民意識を明らかとした。調査結果については地区住民に対するアンケート報告会を開催するとともに，今後の活性化に向けた意見交換会を実施し，実践的な活動へとつなげていった。本研究で明らかとした事項については，各章での調査結果に委ねるとして，本節では，積自治会を通じて積地区住民有志とともに地域資源を活用した活性化策について検討を重ね，その結果を地域活性化計画としてまとめた（2014年3月）。以下にその内容を記す。

積地域活性化計画

Ⅰ．積地区の現状と課題

極端な少子高齢化や過疎化の進行，若者の流出等に伴って，高齢者の一人暮らしや空き家の増加，農地の荒廃等，地域の活力低下が深刻な課題となっている。最近8年間の人口動態（常住人口）を見ても世帯数で約1割，人口数で約2割の減少となっている（平成18年1月113世帯281人⇒平成26年1月103世帯223人）。限界集落化する積地区の自治機能を如何に維持するか，どの様に活性化させるかが，最も憂慮すべき課題といえる。

Ⅱ．積地域活性化計画テーマ［地域資源を活かしたまちづくりの推進］

①　地域資源の現状把握

積地区は，瀬戸内海国立公園の一角，荘内半島のほぼ中央部に位置し，目の

前に粟島・志々島を始めとする備讃瀬戸の島々，背後に紫雲出山を頂き，温暖で風光明媚な自然環境に恵まれた土地柄である。主な地域資源としては，次のようなものが挙げられる。

⑴　古くから拓けた積地区には，由緒ある神社仏閣が多く存在する。
・花の御前・正一位積稲荷神社
境外摂社（明神社，凌神社，宮門神社，日枝神社，厳島神社，西之宮神社，高麗神社，山神社，宇賀神社，国底立神社，三島神社）
・安養寺　十輪院　船積寺跡　吉吾古墳
・紫雲出山登山道中腹の昇天さん，山頂の竜王社　等々

⑵　稲荷神社夏の大祭と積の獅子舞（五段谷嵐）
商売繁盛の神さんとして，愛媛県四国中央市や高松市等遠くからの参拝者も多い。毎年，７月第３土曜に行われる夏の大祭（夜祭）と毎月行われる月並祭がある。特に夏の大祭に奉納される積の獅子舞は，守り継ぎたい自慢の資源である。古くは，多くの露天商などが立ち並び隆盛を極めたが，今その面影はない。

⑶　フラワーパーク浦島と風光明媚な自然景観
三豊市の花と浦島イベント実行委員会が詫間町の特産であるマーガレットを中心にキンセンカ，ポピー，コスモス等，四季折々の花を栽培している。かつては，地元住民が荒廃した休耕田を活用して運営していたが，従事者の高齢化により，今はイベント実行委員会から委託を受けた美咲クラブの方々が三豊市からの補助金によって運営している。このフラワーパークと一体となった海，島々等の自然景観は貴重な資源である。

⑷　紫雲出山登山遊歩道と金堀場（洞窟）
瀬戸内海を眺望する景勝の地，紫雲出山は，地域の里山として黒崎から遊歩道的な登山道があり，誰もが気軽に登山を楽しんでいた。又，脇道を少し入った所に金堀場と呼ばれる人工の洞窟がある。

⑸　自然豊かな海浜での磯釣り，磯歩きによる海の幸
近世には積浦と呼ばれ，地形に守られた天然の良港があり，限られた平地

を活かした稲作とともに，海の幸にも恵まれた自然条件にある。瀬戸内海特有の大きな潮の満ち引きにより，干潮時には歩ける範囲が広がり，貝やタコなどを見つけながら磯歩きが楽しめる。

⑹　浦島伝説に因んだ地名［積，金輪の鼻］

太郎が乙姫に送られて，宝物を積んでついた所が積で，海岸で固い握手を交わした時，乙姫の腕輪（金の輪）が落ちた所「金輪の鼻」と呼ばれている。

②　地域資源を活かした活性化計画の概要

⑴　地域資源①の⑴からの検討

積地区の史跡めぐりコースの設定，積史跡マップの策定

⑵　地域資源①の⑵からの検討

稲荷神社夏の大祭を昔のように盛り上げる。昔の賑わいを復活させる。その手段として，例えば，夏祭りコンサートの様なイベントを企画する。積の獅子舞（五段谷嵐）の保存活動を積極的に推進し，古式所縁の獅子舞を後世に伝承すると共に若者の交流を促進する。

⑶　地域資源①の⑶からの検討

フラワーパークの運営は，三豊市の花と浦島イベント実行委員会美咲クラブの方々が主体となって運営しており，積自治会として関わっていないのが現状となっている。今後においては，積自治会としても他力本願ではなく，花と浦島イベント実行委員会や美咲クラブと連携し，積極的な整備を推進し貴重な資源の活用を図る必要がある。具体案としては，以下が挙げられる。

・周辺耕作放棄地を整備して園の拡大，充実を図る。

・最も景観の良い隣接遊休地を借上，ベンチ，カフェ等を整え憩いの場，交流の広場を確保する。

例：フラワーカフェというような名称で，イベントに合わせた期間限定のカフェを積自治会と香川大学が協力して行う。

・地元で採れた日曜産直市やイルミネーションの設置。

例：積マルシェと題し，積地区住民の方々の積極的な参加を募り，今後のまちづくりの担い手づくりを行う。

・フラワーパークと海の間を整備して海との一体感を醸成する。

⑷　地域資源①の⑷からの検討

昔の登山道を整備し，瀬戸内海を眺望する里山として健康づくりを促進する。併せて金堀場（洞窟）の現状を確認する。

⑸　地域資源①の⑸からの検討

海浜清掃等自然環境の保全活動の推進。磯歩きツアーの実施。

⑹　地域資源①の⑹からの検討

古くから伝わる浦島伝説を語り継ぐ。積公民館にて，浦島太郎の紙芝居劇場。

③　推進体制の整備

現在，若年層の定住が殆んど無い状況の中で，獅子舞保存会会員や消防団員等は，車で15分内外の隣町に住む積出身の若者が大半を占め，彼らの参画によって成り立っている。こうした若者の存在を尊重し，積地区内だけで活性化に向けたメンバー集めをするのではなく，より広域に荘内半島区域との交流を深め，イベントやまちづくりワークショップ等への積極的な参加を促していく。具体的には，以下の取り組みが挙げられる。

⑴　古里活性化委員会（仮称）の設置

構成員：自治会役員，稲荷神社役員，老人会，獅子舞保存会，消防団，女性有志，近隣在住若者

⑵　部門別実行委員会，部会の設置

⑶　まちづくり研修会（ワークショップ）の開催

仕掛け人，やる気のある人材の発掘・育成，空き家の活用策勉強会

⑷　情報発信の促進

会員相互の情報交換並びにホームページやSNS等で活動内容を広く発信する。

以上

5－2．今後の展望と考察

前節において，本研究で実施した住民アンケート調査や意見交換会の結果をもとに，積地区住民有志とともに積地域活性化計画をまとめた。本節では，その後（2014 年度以降）の積地区における地域活性化計画の実施経緯を記すとともに，今後のコミュニティの主体形成を狙いとした実践活動に対する展望や課題について述べる。

積地区におけるコミュニティの主体形成支援（「積楽しまん会」の設立）

本研究成果は主に 2013 年度の研究・調査をもとに執筆しているが，西成研究室では 2013 年度から 2015 年度までの 3 年間に渡って，積地区を対象としたコミュニティの主体形成支援を実施してきた。

先述したように（4 章），2014 年 2 月に地域資源アンケート報告会および住民意見交換会を実施した。こうした取り組みを受けて，積自治会ではまず，積自治会のなかに積地区活性化検討委員会を組織することとなる。その後，同委員会と西成研究室との間で活性化計画の内容とともに計画実施に向けた検討会を重ねていくこととなった。2014 年 7 月には，同委員会において実施主体となるチーム名称をワークショップ形式で検討し，結果として「積楽しまん会」という名称で活性化に向けた取り組みを実施していくことが決定した。研究室としては，活性化計画の実施主体であり，将来的にはコミュニティの主体づくりを担っていく積地区のプラットフォームとして「積楽しまん会」の活動を支援していくこととなった。

名称決定後，積地区の方々にその存在や役割を知っていただくためにも，単なる話し合いだけではなく，実体的な活動をおこしていくこととなった。ワークショップ形式での意見交換を重ねつつ，2014 年 10 月にはコスモスが一面咲きほこる秋のフラワーパークを舞台として，「積マルシェ」を開催することとなった。積地区の方々が自分の家で採れた野菜や自身で作成した工芸品など，持ち寄りたいものを自由に持ち寄って販売するマルシェ（自由市）を実施することで，小学校廃校以来，これまで一堂に会する機会に乏しかった住民同士の交流の機会をつくることが積マルシェの目的の 1 つである。また，積フラワー

パークの活用実験という意味合いも込めており，積楽しまん会と西成研究室の協働で主催・実施した。結果としては，スイーツやおこわといった食品，ガラス細工や紙細工などの工芸品など，約 30 品目 16 の個人や団体がマルシェに出品し，地域内外を含めて約 200 名近い来訪者が訪れることとなった。もともとこの地域では「良心市」という現在の産直市にも似た形式の市が伝統的に開催されており，こうした地域としての記憶や経験が素地となって，初めての取り組みでありながらも，多くの出品者や参加者に恵まれたとも考えられる。

参加者のなかでも積地区在住の高齢者の方からは「久しぶりに家を出て散歩する気になった」「地域の皆さんと会えて本当に良かった」など，積マルシェが地域内外の方々にとってまたとない交流の場となりえていたことがわかる。また，この取り組みは四国新聞に掲載され（図 18），積楽しまん会の存在が県内に広く知られるきっかけとなった。

このように，積楽しまん会の活動は積マルシェでの成功体験が良い契機となり，その後，様々な活動が芽を出すこととなる。積楽しまん会と西成研究室によるワークショップ形式での話し合いはその後も継続し，実体的な活動としては，現在は登れなくなっている紫雲出山山頂までの登山道の整備，増えすぎた竹林を活かした竹灯りの作成，積稲荷神社での獅子舞と竹灯りのコラボ，積楽しまん会の Facebook による情報発信，積地区入口付近での「積へようこそ」看板設置など，2015 年度末までに多くの活動が実施されることとなった。これらの活動は，活性化計画にて検討した計画

花の名所 会話の花咲く

三豊 詫間町積地区 住民の会設立

にぎわい創出へ 香大生が後押し

地域のにぎわい創出を目指し、三豊市詫間町の積地区の住民が新たに「積 楽しまん会」を設立し、香川大の学生らの後押しもあって、10月中旬にはコスモスが咲く「フラワーパーク備島」で第1弾のイベントを成功させ、まちを感じている。当面は住民の交流強化に重点を置き、将来的には市外からの観光客誘致も考えているという。

約200人が暮らす積地区は、高齢化や過疎化が進み、住民がなじめる機会が減少、住民は「何とかせなければ」と不安感を抱いていたが、自分たちの力だけでは難しかったという。

思いが動き出したのは昨秋のこと。県の委託事業でコミュニティーづくりに取り組む香川大経済学部の西成典久准教授や新学部の学生がフラワーパークの活用化に参画、地域が誇る「花の名所」で住民と一緒に居動を盛り上げる中で、積地区や在内半島の交流拠点出身の横田さん、学生たちは、何日かのうちに積地区に足を運び、地域資源などについて話し合い、今年3月に楽しまん会が立ち上がった。

今月19日には初のイベントを開催。会員の高橋さん、子育て世代も加わり、総勢40人がカフェ、フリーマーケット、郷土料理などの彩り豊かに展開。当日は咲けるかな満開のコスモスが訪れる人の目を楽しませた。

この間、活動に携わってきた香川大3年の林彩香さん(20)は「手助け住民の拠点となり、次につながるような発展していきたい」と抱負。楽しまん会の最年長会員(84)は「学生たちの協力で大勢の人が集まり、手応えを感じている。今後は市内外の人を引きつけるような企画を考えたい」と話していた。

「積 楽しまん会」のメンバー＝学生たち＝三豊市詫間町、フラワーパーク備島

図 18　フラワーパークを活用した積マルシェ
（四国新聞 2014 年 10 月 25 日掲載）

内容が徐々に実践されていることを示しており，絵に描いた餅になりがちな活性化計画が実現していくその背景に，積楽しまん会というコミュニティの主体組織の存在が挙げられる。

コミュニティの主体形成支援における成果と考察

最後に，こうしたコミュニティの主体形成支援が地域側に及ぼす影響や成果について考察を進めていきたい。ここで，直近となる 2006 年から 2016 年までの積地区の人口推移をみてみたい。[13] 住民基本台帳のデータをもとにその推移を把握したところ，以下のような推移となった（図 19）。注目すべきは，2015 年までは堅調に人口減少が進んでいたが，2015 年以降はその減少幅は急激に少なくなるとともに，2016 年にはむしろ人口が微増する結果となった。

積地区は本研究で明らかにしたように，年齢人口からみても日本の典型的な中山間地域であり，人口の減少はまさに不可避な現象といえる。にもかかわら

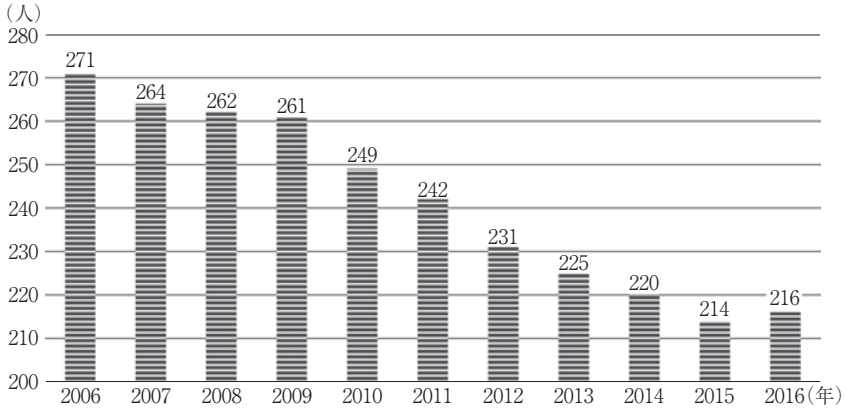

図 19　積地区人口推移（2006-2016）[14]

13）　本稿 2 - 2. での人口調査では年齢別人口を把握するため，2010 年までに国勢調査の人口データを用いている。
14）　三豊市住民基本台帳より各年 10 月 1 日の人口データを取得。

ず，積地区ではここ数年で増加傾向へと変化している。むろん，こうした増加傾向は極めて一時的なものであり，2017 年以降は再び減少傾向になることも十分考えられる。しかし，仮に一時的なものとなりえたとしても，本研究の支援時期と重なるような形で人口が増加へと転じていることは特筆に値する。

こうした直近の人口増加は，積地区への移住者が急増したことにその要因がある。2014 年春，積楽しまん会が設立される時期と重なるように，大阪から１組の家族が移住してくることとなる。30 歳代の夫婦に 3 人の子供たち計 5 人が積地区に移住するが，地縁があったわけでもなく，三豊市の空き家バンクを活用して，海と山と適度に距離が近いこの荘内半島に越してくることとなった。2014 年当時，積自治会長であった小玉氏によれば，地縁もなくこうした若い家族が移住してくるのは知る限り初めてのケースである，と述べている。この若い家族は地域コミュニティとのつながりも積極的に求めており，早速，積楽しまん会の集いに参加し，その後は中心的なメンバーとして活動していくこととなる。こうした都市部からの I ターンはその後も増加し，2014 年夏には 2 世帯 4 人が移住することとなり，2014 年だけで 3 世帯計 9 人もの移住者が積地区に住まうこととなった。その後，2015 年には 1 世帯 4 人，2016 年には 2 世帯 3 人が積地区に移住することとなり，その結果，2014 年から 2016 年にかけて，合計 6 世帯 16 人の方々が移住することとなり，200 人規模の集落にとっては 1 割にも届くような人口が突然増加したこととなる。こうした移住を巡る状況が，2015 年以降の人口増を引き起こすこととなった。

積楽しまん会においても，設立当時から移住者を増やす取り組みについて検討を進めており，具体的には積地区内における空き家の把握や移住者の受け入れ態勢について取り組みを進めてきた。移住希望者の方から直接積楽しまん会に移住先見学の連絡があることもあり，移住に対する外部からの需要が思った以上に存在していることが活動のなかでわかってきた。しかし，現実的には移住者を受け入れられる空き家の数のほうが少なく，空き家自体は集落内にあるものの，整備費用や権利関係の問題から移住可能な空き家を増やすことは困難であり，今後，鰻登りに移住者が増えていくことは考えにくい。とはいえ，他所からの若い移住者が今後の地域づくりに与える影響は極めて大きく，今後の

積地区における移住の推移や地域に与える影響・効果については調査を継続していきたい。

以上，本稿ではコミュニティの主体形成を狙いとして，積地区における地域資源の現状や地域づくりに対する住民意識を把握し，地域資源の保全・活用に向けた活性化計画を積地区住民有志とともに検討，整理した。そのうえで，考察部分では活性化計画を実現していくための実施組織の立ち上げについてその実践プロセスを記すとともに，コミュニティの主体形成支援が地域に与える効果や影響について，近年の人口推移を交えながら考察を行った。前述したように，積自治会と西成研究室の協働によってコミュニティの主体となる「積楽しまん会」が結成され，本会が活性化計画のエンジン役として役割を担っていくこととなった。積マルシェや登山道整備など，具体的な活動によって１つ１つの成果は積み重ねられているが，果たしてこうした活動が積地区全体に対して，あるいは積の地域づくりに対して，どのような成果を生み出しているのか，少し立ち止まって考える必要があろう。景観10年，風景100年，風土1000年，という言葉があるように，地域の景観づくりはとても時間のかかる取り組みである。地域づくりにも同じことが言え，地域の根本的な問題解決には，10年や20年という長期的な時間軸で地域全体を巻き込むような取り組みを考えていく必要がある。そのため，コミュニティの主体形成支援が地域側に及ぼす影響や成果については，短期間で評価することは極めて困難であると言わざるを得ない。本稿では，積地区で実施したコミュニティの主体形成支援に関する取り組みの詳細やその成果については一部の記載にとどまっており，より詳しい内容や成果の把握については今後の活動経過をみつつ，別稿にてあらためて詳細を記述していきたい。

なお，本研究は香川県農村整備課「ふるさと水と土保全対策事業」より研究助成を受けて遂行したものである。調査をともに実施していただいた積楽しまん会の皆さま，調査にご協力いただいた積地区住民の皆さま，調査メンバーとして尽力してくれた研究室の学生諸氏にはあらためて感謝の意を表したい。